

行政用語における UX 的用語設計の課題：税・社会保障用語を中心とした事例分析

Abstract

確定申告期には、初めて申告する住民が「何を申告するのか／どこへ提出するのか／いつまでに／いくら支払う（戻る）のか」といった基本的な行動情報を、行政用語だけから復元できず戸惑い、問い合わせ・誤申請・未納等の実務コストに波及しうる。本稿は、税・社会保障領域の行政用語が制度内部の処理単位（分類・状態・手続き）に最適化される一方で、住民が必要とする行為・判断（主体／行為／金銭移動／時間）を伝えにくい点を、用語事例に基づき整理する。加えて、用語を 4 要素に分解して「欠けている情報」を特定し、住民向け文書・Web 案内で再利用可能な最小テンプレートと、言い換え案（翻訳表）を提示する。

English abstract (draft). This paper examines how administrative terms in Japan's tax and social security domains are optimized for internal processing (classification, state, and procedural units) while obscuring the action-relevant information that first-time users of the annual tax return process need to make decisions (actor, action, money flow, and time). Based on a conversation log of user questions and explanations, we extract recurring omission patterns and propose a minimal "UX translation" template and a translation table that can be reused in citizen-facing documents and web guidance.

1 はじめに

本稿の問題意識は、制度の合理性そのものではなく、制度理解を媒介する用語設計（行政日本語）の UX 的課題にある。特に確定申告期には、初めて申告する住民が「何を申告するのか／どこへ提出するのか／いつまでに／いくら支払う（戻る）のか」といった基本的な行動情報を、用語だけでは復元できず戸惑う場面が多い。その結果、窓口・電話・Web 等への問い合わせが集中し、誤申請や手続きの遅延といった実務上の負荷につながりうる。

2 実務的目的と成果物

本稿は、(1) 誤解が生じやすい用語を、住民の行為・判断に必要な情報（主体／行為／金銭移動／時間）という観点で分解し、(2) 欠落情報のパターンを整理し、(3) 住民向け文書で再利用できる「言い換え（翻訳）テンプレート」と「言い換え表」を提示することを目的とする。

2.1 研究質問

本稿は、次の問いに答える。

1. 税・社会保障領域の行政用語は、初学者（例：確定申告の初回経験者）が必要とする行動情報（主体／行為／金銭移動／時間）を、どのような形で欠落させるのか。
2. 欠落を埋めるための最小テンプレートは、どの程度一般化できるか。

3. 会話ログに現れる比喩・皮肉表現は、どのような「違和感（理解の失点）」を指し示しているか。

3 先行研究・位置づけ

本稿は、行政文書の可読性改善（Plain Language）や専門用語のコミュニケーション研究に関心を寄せつつ、特に「用語が指す内部状態」と「利用者が必要とする行為・判断情報」のずれを、UX の観点から記述する点に特徴がある。Plain Language の国際的指針として ISO 24495-1:2023¹があり、また行政の実務としても平易化を推進する制度・ガイダンスが存在する（例：米国の Plain Writing Act²、GOV.UK の Content design³）。

4 研究対象とデータ

分析対象は、税・社会保険に関する行政用語のうち、日常生活上の意思決定（申告・納付・加入・免除等）に直結し、かつ誤解が生じやすい語（例：確定申告、特別徴収、扶養、標準報酬月額、被保険者）とする。基礎資料として、国税庁等が公開する用語解説（例：専門用語集⁴や、行政文書の平易化に関する指針⁵）を参照する。

4.1 会話ログ（補助資料）の扱い

付録の会話ログは、税・社会保険に関する用語説明で出た質問と回答を、初学者のつまづき把握のために整理した補助資料である。分析では、個別事例の真偽や網羅性よりも、用語理解における**欠落情報のパターン**（主体／行為／金銭移動／時間）を抽出することに重点を置く。

会話ログは個人情報や識別可能性のある情報を含まない形で扱い、固有名詞・具体的な属性は必要に応じて一般化した（例：個人名・勤務先・地域名等の削除）。

なお、付録の会話ログは、初学者が「どこで躓くか」を可視化する補助資料として用い、表現（比喩・皮肉等）は観察対象として扱う。

5 方法：分析枠組みと整理手順

用語を「誰が（主体）／何をする（行為）／お金がどう動く（金銭移動）／いつ（時間）」の4要素に分解し、欠落パターンを整理する。具体的には、(1) 会話ログから「誤解が生じた箇所」を抽出し、(2) 4要素の欠落（例：主体の欠落、時間情報の欠落）を記述し、(3) 欠落を補う言い換え案を作成した。

6 会話ログから得られた観察（文体を含む）

本稿のデータである会話ログには、制度理解のつまづきがそのまま表出しており、説明の過程で比喩や皮肉（例：「暗号」「ラスボス級」等）が用いられている。これは学術的主張そのものではなく、初学者が感じる違和感を可視化するための**観察対象**として位置づけ、必要箇所に限って引用する。引用

¹<https://www.iso.org/standard/78907.html>（2026年2月2日閲覧）

²U.S. Department of the Treasury, “Plain Writing Act.” <https://home.treasury.gov/subfooter/site-policies-and-notice/plain-writing>（2026年2月2日閲覧）

³GOV.UK, “What is content design?” <https://www.gov.uk/guidance/content-design/what-is-content-design>（2026年2月2日閲覧）

⁴国税庁「専門用語集」（タックスアンサー用語解説）<https://www.nta.go.jp/taxes/shiraberu/taxanswer/yogo/senmon.htm>（2026年2月2日閲覧）

⁵ISO 24495-1:2023 Plain language — Part 1: Governing principles and guidelines. <https://www.iso.org/standard/78907.html>（2026年2月2日閲覧）

は匿名化のために表現を最小限調整しつつ、意味内容（どの語で何が欠けたか）が損なわれない範囲で行う。

「標準報酬月額」は毎月お金を左右するのに、名前だけで中身を理解できる人はほばいない。

「被保険者」は日本語としては正しいが、当事者が一番混乱する。

7 事例分析

7.1 税（例：確定申告、国税・地方税、特別徴収）

会話ログで提示された「公式名／実態／言い換え」を、論文用に表として再掲する。

Table 1: 税関連用語の UX 的言い換え（抜粋、会話ログより整理）

公式用語	ユーザー視点での実態（要約）	言い換え案（例）
確定申告	本人が所得税を計算して申告・納付（または還付請求）する手続き	所得税自己申告
国税	国に納める税（全国共通）	国に払う税金
地方税	自治体に納める税（住所地等に依存）	自治体に払う税金
特別徴収	給与から自動的に差し引かれる形で徴収される	給与天引き（徴収）
普通徴収	納税者が請求書等により自分で支払う	自己支払い（徴収）

表1に相当する内容は、初学者が「誰に払うか」「どう払われるか」を用語だけでは復元できない点を示している。例えば「国税／地方税」は徴収主体（国／自治体）を表す分類語であり、行為（支払う）・金銭移動（天引き／自己支払い）・時間（いつ請求が来るか）を含まない。

7.1.1 国税／地方税：主体（誰に払うか）の欠落

「国税」「地方税」は制度の分類としては簡潔である一方、初学者にとっては「結局どこに納める（誰に払う）のか」「窓口や問い合わせ先がどこか」が語からは推定しにくい。言い換えとして「国に払う税金」「自治体に払う税金」のように主体を前面に出すことで、支払い先（主体）と行為（払う）が同時に復元される。

7.1.2 特別徴収／普通徴収：金銭移動（どう払われるか）の欠落（そして直感の逆転）

「特別」「普通」は内部区分語であり、利用者の行為（自分が何をするか）や金銭移動（給与から差し引かれる／自分で払う）を直接表さない。その結果、住民は「納付の手続きが必要か」「いつ給与や口座から引かれるのか」といった判断に迷いやすい。

ここで UX 的に面白いのは、語感としては「特別＝例外」「普通＝一般的」と解釈されやすい一方で、住民が日常的に経験する支払い体験としては、むしろ**特別徴収（給与天引き）がデフォルトに見える局面が多い点**である。つまり、住民の認知モデルでは「特別」が**通常運転**として現れやすく、「普通」が**例外的に自分で払う状態**として現れやすい。このズレは、制度側の分類（事業主を通じた徴収か、本人による納付か）と、住民側の関心（自分が何をするか／いつ引かれるか）が一致していないことに由来する。

さらに「徴収」という語自体が、住民の行為というより行政の行為（取り立て）を想起させやすく、利用者が**自分の To do**に接続しづらい。したがって住民向け案内では、「特別徴収＝給与天引き

（自分で払う手続きは基本不要）」「普通徴収＝自分で納付（納付書・口座振替・期限などを確認）」のように、金銭移動と To do を同時に提示する言い換えが有効である。

7.1.3 確定申告の周辺用語（初学者向け）

確定申告期に初めて申告する住民がつまづきやすい語について、行為・金銭・時間が読み取れる形で最小限の言い換えを示す（英語版に向けては、固有名詞として *Kakutei Shinkoku* を保持しつつ説明文を付す方針が取りやすい）。

Table 2: 確定申告の周辺用語の言い換え（初学者向け、会話ログより整理）

公式用語	実態（要約）	言い換え案（例）
確定	いったん提出した内容を採用し、手続きを進める（後から直せる）	いったん確定（処理開始）
修正申告	間違い等により、後から出し直して追加で納める	追加・訂正の申告
更正の請求	払いすぎ等により、後から返金を求める	払いすぎ返金の申請
還付	税金が戻る	税金が戻る（返金）
控除	税金が安くなる仕組み	税金割引

7.2 社会保険（例：扶養、標準報酬月額、被保険者）

同様に、社会保険領域で混同されやすい用語について表に整理する。

Table 3: 社会保険関連用語の UX 的言い換え（抜粋、会話ログより整理）

公式用語	ユーザー視点での実態（要約）	言い換え案（例）
扶養（税）	税の割引（控除）の対象になるかどうかの条件	税金割引の対象
扶養（保険）	保険料負担（免除を含む）の扱いが変わる条件	保険料免除の対象
標準報酬月額	社会保険料計算のために給与を区分した等級（ランク値）	保険料計算用ランク
被保険者	社会保険に加入している本人	保険加入者

表中の語はいずれも、制度側の区分（税か保険か、等級か資格か）を短いラベルで示す一方で、住民が知りたい「誰の話か（主体）」「何が変わるか（行為）」「お金がどう動くか（金銭移動）」「いつ反映されるか（時間）」が文面から復元しにくい。特に「扶養」は税と社会保険で効果が異なるにもかかわらず同一語で流通しやすく、初学者にとっては「何が得（控除／保険料の扱い）なのか」が切り分けられないまま理解が止まりやすい。

7.2.1 扶養：多義性（制度間で意味が変わる）の欠落

「扶養」は日常語としての意味（生活費を支える）と、制度語としての意味（税の控除条件／保険の被扶養者条件）が混線しやすい。税の文脈では「税金が安くなる（控除の対象になる）か」という金銭移動が中心であるのに対し、社会保険の文脈では「保険に加入するのは誰か」「保険料を払うのは誰か（免除されるのは誰か）」という主体・行為が中心になる。住民向けには「税の扶養（税金割引の対

象)」「保険の扶養（保険料免除の対象）」のように、制度名を補語として付し、何が変わるかを短く明示することが有効である。

7.2.2 標準報酬月額：ランク語による金銭移動・時間の欠落

「標準報酬月額」は、給与等の報酬額をそのまま用いるのではなく、一定の幅で区切った等級（ランク）に丸め、保険料（および将来の給付額の計算要素）を計算するための内部値である。制度側にとっては計算の安定性と事務処理を両立する合理的な設計である一方、初学者にとっては語から直ちに次の2点が復元できない。

欠落(1)：金銭移動（毎月いくらに影響するか） 「標準」「報酬」「月額」という語の構成は一見説明的であるが、実際に知りたいのは「自分の**毎月の保険料が、どの基準額（ランク）**で決まっているか」である。したがって住民向け案内では、言い換えとして「保険料計算用ランク」のように役割を先に示した上で、少なくとも「このランクで**毎月の社会保険料が決まる**」という金銭移動を明示する必要がある（4要素のうち金銭移動の復元）。

欠落(2)：時間（いつ変わる／いつから反映されるか） 「標準報酬月額」は固定値ではなく、一定のタイミングで見直されうる。しかし「いつ見直されるのか」「変更がいつから反映されるのか」は語から読み取れず、住民は「昇給したのに保険料が変わらない／急に変わった」等の違和感を抱きやすい。案内文では、見直しが**定期**（例：年1回の定時の見直し）および**随時**（例：大きな変動があった場合の見直し）で起こりうることを、そして変更は**一定の遅れを伴って**反映されうることを、制度名を出し過ぎない範囲で1~2文で補うのが有効である（4要素のうち時間の復元）。⁶

主体／行為（To do）の接続 さらに、住民が混乱しやすいのは「自分が手続きするのか（行為）／会社が手続きするのか（主体）」である。会社員の場合は原則として勤務先が届出を行うため、住民向けの説明は「あなた（被保険者）の標準報酬月額は、勤務先が届出した内容に基づき決まる」等と主体を明示し、「給与明細や保険料通知で**標準報酬月額（ランク）**を確認できる」等の次の行為（To do）を添えると、制度語が行動情報につながる。

7.2.3 被保険者：資格語による主体の欠落

「被保険者」は日本語としては受け身の形であり、「誰のことか」を直感的に取りづらい。言い換えとして「保険加入者」とすることで主体が明確になり、「会社が手続きするのか／本人が手続きするのか」といった次の行為（To do）の説明につなげやすくなる。

7.2.4 社会保険用語の欠落パターン（例）

社会保険領域では、(1) 資格語（被保険者等）が「誰が対象か」を直感的に示しにくい、(2) ランク語（標準報酬月額等）が「いくらを基準に保険料が決まるか」を直接言わない、(3) 多義語（扶養等）が制度間で意味を変える、という欠落が目立つ。住民向けの案内では、まず「あなた（本人）／家族／勤務先／年金事務所等」のどれが主体かを明示し、次に「保険料が増える・減る／加入手続きが必要／会社が届出する」等の To do を1文で補うことが有効である。

⁶ 標準報酬月額の決まり方・見直し（定時決定／随時改定）の制度説明は、日本年金機構の公開資料（「標準報酬月額」「定時決定／随時改定」）を参照（2026年2月2日閲覧）。

8 改善指針（UX 翻訳ルール）

8.1 最小テンプレート（4 要素）

行政用語を住民向けに説明する際は、少なくとも次の 4 要素が文面から復元できることを目標とする。

- 主体（誰がやる／誰がされる）
- 行為（何をする）
- 金銭移動（払う／戻る／差し引かれる 等）
- 時間（いつ／いつまでに／いつ頃変わる）

8.2 チェックリスト（書き換え時の確認）

Table 4: UX 翻訳チェックリスト（簡易）

観点	確認内容
主体	「誰が」が明示されているか（本人／勤務先／行政等）
行為	住民がやる操作（申告・提出・支払い等）に置き換えられているか
金銭	お金がどちら向きに動くか（支払う／戻る／天引き）を言っているか
時間	期限・頻度・反映時期（年 1 回、数か月後等）が書かれているか
多義性	同じ語が複数制度を指していないか（必要なら「税の～」「保険の～」に分割）
内部状態語	「確定・標準・特別」等が単独で前に出ていないか（補語を付ける）

8.3 ルール（命名・説明の優先順）

1. 内部処理語（確定・標準・特別等）を単独で前面化しない（必要なら補語を付す）。
2. 主体と行為を明示する（例：自己申告、給与天引き）。
3. 一語一制度を原則とし、多義語は分割する（例：「税の扶養」「保険の扶養」）。
4. 可能なら「次に何をすればよいか」を 1 文で追記する（To do の提示）。

9 結論

本稿は、税・社会保障領域の行政用語が、(1) 主体の省略、(2) 行為の名詞化、(3) 内部処理語の前面化、(4) 多義語の放置、により、住民の理解と行動（申告・納付・加入・届出）を阻害しうること示した。加えて、用語を「主体／行為／金銭移動／時間」の 4 要素に分解する最小テンプレートにより、誤解ポイントの特定と、通知文・案内文における説明不足の補完（誰が何をし、いつ、どこへ、いくら／何が起きるか）を手順化できることを述べた。

9.1 限界と今後の課題

本稿は会話ログに基づく定性的整理であり、提案した言い換えが理解度や行動に与える効果は未検証である。今後は、実際の通知文・Web 案内の書き換え（A/B 比較等）により、理解度（自己申告）・問い合わせ件数・差戻し率等の指標で評価する必要がある。

10 英語版への展開（将来課題）

本稿の枠組みは訳語選定（dictionary translation）よりも、利用者の行為・判断に必要な情報（主体／行為／金銭移動／時間）を落とさずに提示する点に重点がある。英語版では、(1) 公式用語（日本語・制度名）(2) 説明用英語（plain English）(3) 利用者の行為（to do）を分離して記述する構成が有効と考えられる。

参考文献・参照 URL

- ISO. ISO 24495-1:2023 Plain language — Part 1: Governing principles and guidelines. <https://www.iso.org/standard/78907.html>（2026 年 2 月 2 日閲覧）
- U.S. Department of the Treasury. Plain Writing Act. <https://home.treasury.gov/subfooter/site-policies-and-notice/plain-writing>（2026 年 2 月 2 日閲覧）
- U.S. Department of the Interior. Plain Language. <https://www.doi.gov/plainlanguage>（2026 年 2 月 2 日閲覧）
- GOV.UK. What is content design? <https://www.gov.uk/guidance/content-design/what-is-content-design>（2026 年 2 月 2 日閲覧）
- W3C WAI. Use Clear and Understandable Content (Cognitive Accessibility Objective). <https://www.w3.org/WAI/WCAG2/supplemental/objectives/o3-clear-content/>（2026 年 2 月 2 日閲覧）
- 国税庁. 専門用語集. <https://www.nta.go.jp/taxes/shiraberu/taxanswer/yogo/senmon.htm>（2026 年 2 月 2 日閲覧）
- 日本年金機構. 標準報酬月額（解説ページ）.（2026 年 2 月 2 日閲覧）
- 日本年金機構. 定時決定／随時改定（解説ページ）.（2026 年 2 月 2 日閲覧）
- 文化庁. 「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」の公表について. https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/92488301.html（2026 年 2 月 2 日閲覧）

付録：会話ログ（原文）

あなた：

確定申告って何かの略語？

ChatGPT：

結論から言うと、「確定申告」は略語ではありません。

これは

「確定（かくてい）」＋「申告（しんこく）」

という 正式な日本語の行政用語 です。

言葉を分解すると

確定：金額や内容を最終的に決めること

申告：自分から国（税務署）に申し出ること

つまり

1年間の所得や税額を“確定させて”、それを“申告する”手続き
という意味になります。

じゃあ「何の確定？」かという
主にこの3つです

所得金額の確定

税額（払う税金 or 返ってくる税金）の確定

控除内容の確定（医療費、扶養、保険料など）

略語っぽく感じる理由
「申告」だけでも意味が通じる

「年末調整」と対になって使われる

行政用語なのに日常語化している

このあたりで「元は長い正式名称があるのでは？」と感じやすいですね。

参考：実は略されている“関連用語”
確定申告自体は略語じゃないですが、周辺には略語があります。

青色申告（←正式には 青色申告制度）

白色申告

e-Tax（これはガッツリ略語）

もし

「じゃあ“申告”って法律上どう定義されてるの？」
とか
「年末調整と確定申告は、制度設計的に何が違うの？」

みたいな切り口が気になったら、そこも掘れますよ。
（同意だけでなく別視点も欲しい派でしたよね）

あなた：
確定だけじゃさあ、何を確定させるかわかんないよね。申告だけでも何を申告するかわからないよね。

ChatGPT:

うん、その感覚はかなり妥当だと思う。
「確定申告」って言葉、単体だと情報量が少なすぎるんだよね。

なぜ分かりにくい（言語として）
おっしゃる通りで、

確定：何を？

申告：何を？ 誰に？

が どちらも省略されている。

つまり「確定申告」は
文として未完成な名詞
なんだよね。

本当は何を言ってるか（省略を補うと）
行政の頭の中では、だいたいこれ：

「所得税額を確定するための、所得内容の申告」

もう少し噛み砕くと

何を確定？
→ 税額（＋その根拠となる所得・控除）

何を申告？
→ 自分の所得の内訳と控除

でもそれを全部言うと長すぎるから、
いちばん強い動詞2つだけ残したのが「確定申告」。

なぜこんな名前になったか（制度側の都合）
ここが面白いところで、

1☑ 税務署目線だと「確定」が主語
国の関心は

いくら税金が確定するか

だから「確定」が前に来る。

2☑ 国民目線だと「申告」が行為
国民がやるのは

申告すること

だから「申告」が後ろに来る。

国の目的＋国民の行為を
無理やり2語で圧縮した結果、

抽象語だけが残った。

もし名前をちゃんと付け直すなら（例）
分かりやすさ重視なら、例えば：

「所得と控除の自己申告による税額確定手続」

「年次所得税自己申告制度」

「税額自己計算申告」

…でもこれ、役所文書としては長すぎて死ぬ（笑）

だから起きてる問題
初見だと意味が取れない

学校で説明されないと理解不能

「やらなきゃいけない儀式」化する

制度としては合理的なのに、
ネーミングが完全にユーザーフレンドリーじゃない。

これ、あなたが前に言ってた
「制度設計からリビルドしないと」
って話とかなり同じ構造だと思う。

もしよければ次は
「年末調整って名前もおかしくない？」
とか
「青色・白色って誰目線？」
も一緒に解体しよっか。

あなた：
所得税申告だけでよくない確定って言うところがなんかわかりづらいんだろうと思うんだけどな
ChatGPT：
それ、かなり核心突いてると思う。
「所得税申告」で十分じゃない？って感覚、ユーザー目線だと正解寄り。

なぜ「確定」をわざわざ付けているか
結論から言うと、
あれは国（税務行政）側の都合。

税務署が言いたい本音
「これは 仮 じゃない」

「この申告で 税額が確定する」

「あとから源泉徴収や年末調整で直す前提じゃない」

つまり

“最終確定版”の申告ですよ
という意味を「確定」に押し込んでる。

でも国民側からすると…
おっしゃる通りで、

「確定」

→ 何が？ いつ？ 誰が？

行為としては

→ 所得税を申告してるだけ

だから

「所得税申告」＋「これは最終版です」
と説明で補えば済む話。

実は「確定申告」は区別用ラベル
制度的にはこう分けたい：

呼び方 行為の実態

源泉徴収 会社が仮計算

年末調整 会社が最終調整

確定申告 本人が最終決定

「確定」は

“誰が確定させるか”のマーカー
なんだよね。

だから名前が歪んでる

税の種類が出てこない（所得税なのに）

主体（本人）が出てこない

目的（税額決定）が抽象語で隠れてる

結果：

何をする制度か、名前だけでは分からない

もし再設計するなら（あなた案を尊重すると）
あなたの感覚に一番近いのは多分これ

「所得税自己申告」

「所得税最終申告」

「個人所得税申告」

特に

「所得税自己申告」

はかなり良いネーミングだと思う。

税目が明確

主体が明確

「確定」という抽象語を説明に回せる

逆に「確定」を残すなら

残すなら、単体じゃなくて：

「税額確定のための所得税申告」

みたいに

補語つき名称にしないとダメ。

これ、あなたが前に言ってた

「言葉が抽象すぎると制度がブラックボックス化する」

って話、そのものだと思う。

もしよければ

「年末調整」って名前も実は同じ問題を抱えてる

って話、続ける？

あなた：

でも確定って言ってもさあ、後から修正申告が効くならさあ、もう確定って忘れて良くない？

ChatGPT：

これ、めちゃくちゃ筋が通ってる指摘だと思う。

「後から直せるのに“確定”って何？」ってやつね。

結論から言うと

“確定”は絶対確定じゃない

行政内部の状態遷移を指す言葉

なんだよね。

「確定」の正体

確定申告の「確定」は、

その時点で、課税手続きに進めていい状態になった

という意味での確定。

哲学的な確定 ☒

数学的な確定 ☒

事務処理上の確定 ☒

修正申告が効く時点で矛盾してる
おっしゃる通り、

修正申告できる

更正の請求もできる

税務署側も更正できる

双方が後出し可能

これで「確定」は
日常語の感覚とはズレすぎ。

実務的に「確定」が必要だった理由
それでも「確定」を残した理由はたぶんこれ

1☒ いつまでも“仮”だと困る
納期限が決められない

延滞税の起算点が決まらない

国の歳入計画が立たない

一旦、区切り線を引く必要がある

2☒ 行政は「ロールバック前提」の世界
税務は最初から

間違う前提

直る前提

だから
「確定＝凍結」じゃない。

だから言葉としてはズレてる
あなたの言う通り、

「確定って言葉、期待させすぎ」

一般語：もう動かない

行政語：今のバージョンを採用

バージョン確定に近い。

もし言い換えるなら（現実寄り）
実態に一番近いのは：

「一次確定申告」

「自己申告（最終版）」

「課税開始申告」

でもやっぱり
「所得税申告」＋説明
が一番ユーザーフレンドリーだと思う。

まとめ（あなたの主張を整理すると）
修正可能なら「確定」はミスリード

実態は「処理開始の合図」

だから名前から外しても制度は壊れない

むしろ理解は良くなる

これは
同意だけど、制度側の言い分も理解できる
ちょうどいいバランスの批判だと思う。

この流れでいくと次は
「青色申告承認申請書の“承認”って何？」
も同じ地雷なんだけど、行く？

あなた：
結構そういう言い換えが言い返したほうがわかりやすいだろうなって言う。そのユーザがわかからの視点で、こういったのを書き換えた一覧表みたいなのを作れる？

ChatGPT:

作れるし、かなり意味ある作業だと思う。
まさにあなたが言ってるのは

行政用語 → ユーザー用語の翻訳表
だね。

ではまず、**税まわり（確定申告周辺）**を中心に、
「公式名／実態／ユーザー視点の言い換え」
という形で一覧にしてみるよ。

行政用語 → ユーザー視点 翻訳一覧（たたき）

公式の言い方 行政側の意図 ユーザー視点での実態 わかりやすい言い換え案
確定申告 税額を確定させる手続 自分で所得税を計算して出す 所得税自己申告
確定 事務処理を進められる状態 いったん提出した最新版 一次確定／提出版
修正申告 納税者が後から直す 間違ってたから出し直し 追加・訂正申告
更正の請求 払いすぎた税を取り戻す 返金してください申請 払いすぎ返金申請
更正 税務署が直す 税務署からの修正 税務署修正
青色申告 帳簿がちゃんとしてる人向け 会計ちゃんとやってる人 帳簿管理型申告
白色申告 最低限の申告 簡易版 簡易申告
青色申告承認 条件クリアの許可 この方式使っていいよ 帳簿申告 OK 認定
控除 税金減らす仕組み 引いてくれるやつ 税金割引
所得控除 所得から引く 税計算前の割引 計算前割引
税額控除 税額から引く 直接安くなる 直接値引き
課税所得 税金かかる部分 実際に課税される額 税金対象額
納付 税金を払う お金払う 税金支払い
還付 税金が戻る 返金 税金返金
ポイント：なぜ行政用語は分かりにくいのか
共通点をはっきりしてて

主体が書いてない（誰がやるか）

動作が名詞化されてる

内部処理の都合が前に出てる

その結果、

「国語としては正しいけど、生活語じゃない」

ユーザー視点に直す時のルール（設計思想）
これ、整理すると再利用できる。

① 税目を必ず書く

× 申告

○ 所得税申告

② 誰がやるかを書く

× 確定

○ 自己計算／本人提出

③ 結果を先に言う

× 控除

○ 税金が安くなる仕組み

もし次に広げるなら

この表、拡張できる分野が山ほどある：

年末調整まわり

社会保険（扶養／被保険者／標準報酬月額）

補助金・助成金

マイナンバー制度用語

あなた、前に
「制度は悪くないけど、言葉で損してる」
って言ってたけど、これはまさにそれ。

次はどれ行く？

年末調整 vs 確定申告の翻訳表

社会保険用語 地獄一覧

役所文書を UX 視点で書き換えるルール化

この手のやつ、要件定義好きにはかなり刺さると思う。

あなた：
国税と地方税をやってもらっていい？

ChatGPT:

いいよ、これは一番わかりにくいのに一番重要なところだから。
「国税／地方税」って、名前だけで役割が全然伝わってない代表格。

まず全体像をユーザー視点で整理して、そのあと一覧表にするね。

まず前提：ユーザーが本当に知りたいこと
多くの人が知りたいのはこれ

誰に払う税金？

何を基準に決まる？

いつ・どうやって払う？

確定申告と関係ある？

でも
「国税」「地方税」
って言われても、その答えが1つも入ってない。

国税・地方税 翻訳一覧（ユーザー視点）

税の種類レベル

公式の言い方 行政側の分類軸 ユーザー視点での実態 わかりやすい言い換え

国税 国が集める税 国に直接払う税金 国に払う税金

地方税 自治体が集める税 住んでる地域に払う税金 自治体に払う税金

所得に関する税（混乱ゾーン）

公式名称 国税／地方税 実態 ユーザー向け言い換え

所得税 国税 その年の所得にかかる 国に払う所得税

住民税 地方税 去年の所得にかかる 自治体に払う所得税

復興特別所得税 国税 所得税に上乗せ 国の追加所得税

ここ超重要で、

「所得税が2種類ある」

ように見えるのが混乱の原因。

確定申告との関係（ここがブラックボックス）

税金 確定申告との関係 実態 翻訳

所得税 直接計算・申告 自分で計算して国に出す 本人計算・国提出

住民税 申告内容が転送される 勝手に計算される 自治体が後計算

個人事業税 地方税 条件次第で後から来る 自治体の事業税請求

ユーザーからすると

「確定申告＝全部終わり」

と思いたいけど、

地方税は後追い請求なのが罠。

「なぜ分かれてるのか」を噛み砕くと

行政ロジック ユーザー翻訳

国税は全国共通 どこに住んでも同じ

地方税は自治体財源 地域サービスの会費

税源の分散 国と自治体の財布分け

ユーザー的には

「財布が2つあるから請求も2回来る」

で十分。

支払い体験ベースでの言い換え（かなり効く）

行政用語 支払い体験 ユーザー語

国税 確定申告後すぐ 今払う税金

地方税 数か月後に通知 あとで来る税金

特別徴収 給料天引き 給料から自動回収

普通徴収 自分で払う 自分で払う請求書

まとめ：超短縮ユーザー定義

もし一文で言い換えるなら：

国税：

「国に直接払う、今決まる税金」

地方税：

「自治体に払う、あとで請求される税金」

あなたの視点、かなり制度設計寄り

これやってて思うけど、

あなたが言ってるのって単なる「わかりやすさ」じゃなくて

制度の責任分界点を、言葉で可視化しろ

って話なんだよね。

次にやるなら自然なのは：

社会保険（国保／社保／後期高齢）の翻訳表

「特別徴収」という日本語の罪

税と保険をごっちゃにしてる問題

どれ行く？

あなた：

どれも面白そうだけど、その特別徴収と言う日本語の罪って何？ それ？

ChatGPT：

いいとこ突くね。

「特別徴収」という日本語、これはもう“罪”って言っていい部類だと思う。

結論から言うと

ユーザー体験と真逆の名前が付いている

何が起きるかが一切想像できない

しかも“普通”の方が特別に感じる逆転現象

まず何が起きているか（実態）

特別徴収で起きていることは、ただこれだけ：

給料から税金を勝手に（自動で）引かれる

以上。

申請しない

払う操作もしない

金額を意識する前に消える

なのに「特別」って何？

ここが日本語として破綻してる。

行政側の「特別」

本人が払わない

会社が代わりに集める

だから“通常と違う”

徴収ルートが特別なだけ。

ユーザー側の感覚
何もしてない

いつの間にか減ってる

一番「普通」に感じる支払い

体験としては一番ノーマル。

「普通徴収」の方がよほど特別
比較するとおかしさが際立つ。

用語 実態 ユーザー感覚
特別徴収 給料天引き 自動
普通徴収 請求書で払う わざわざ
なのに名前は逆。

「普通」＝自分で払う

「特別」＝自動回収

言語の軸が行政側に 90 度倒れてる。

UX 的に何が悪いか
1☒ 行為が想像できない
「特別徴収」と聞いて

給料から引かれる
って連想できる人、ほぼいない。

2☒ 主体が消えている
誰が払う？

誰が引く？

が名前から一切分からない。

3☒ トラブル時に説明不能
住民税が高い

二重で引かれてる？

こういう時に

「特別徴収です」
って言われても何の説明にもなってない。

ユーザー視点の言い換え案（本命）
実態に忠実なのはこれ

公式用語 ユーザー語
特別徴収 給与天引き徴収
普通徴収 自己支払い徴収
切替 支払い方法変更
これだけで
問い合わせ半分になるレベル。

それでも「特別」を残すなら
百歩譲って残すなら補語必須。

「給与からの特別徴収」

「事業者代行徴収（給与天引き）」

まとめ（罪の中身）
特別徴収という日本語の罪とは：

体験と名前が逆

行為が想像できない

行政内部視点押し付けている

結果として誤解と不信を生む

これは

制度は悪くないのに、言葉が UX を破壊している
典型例。

ここまで来ると次は自然に

「扶養」という言葉の暴力性

「標準報酬月額」という暗号

「被保険者」という誰目線語

あたりが並ぶけど、どれ斬る？

あなた：
全部面白いね。ちょっとオススメでやってもらっていい？
ChatGPT：
いいね。じゃあいちばん破壊力があって、生活影響もデカイ順で

今回は「扶養」をオススメ枠でいくね。
(理由：誤解の量 × 人生イベント直撃率 が最大)

「扶養」という日本語の暴力性
結論から
扶養＝養っている／養われている
って響きが、現代制度の実態とズレすぎ。

結果として

自立して働いてる人が「扶養に入ってる」と言われる

結婚・離婚・就職で心理的ダメージが出る

制度の判断ミスが多発する

まず何を指してる言葉なのか（実態）
「扶養」と一言で言うけど、中身は3つ別物。

種類 何が変わる？ 実態
税法上の扶養 所得税・住民税 税金が安くなるか
社会保険の扶養 健康保険 保険料を払うか
会社の扶養 手当 会社ルール
でも全部まとめて「扶養」。

ユーザーが勘違いするポイント

☒ よくある誤解
「扶養に入る＝働けない」

「扶養から外れる＝迷惑をかける」

「扶養されてる＝依存してる」

☒ 実態
所得ラインを超えるかどうか

保険料を誰が払うか

税の割引が誰につくか

生活態度や自立度は一切関係ない。

なぜ「暴力的」か
1 ☒ 言葉が上下関係を作る
扶＝支える

養＝養う

制度上の分類なのに、人格評価に聞こえる

2☒ 主体がねじれている
誰が得する？

誰が払う？

が言葉に出てこない。

3☒ 境界条件が曖昧
年収 103 万？ 130 万？

税？ 保険？ 会社？

全部違うのに同じ単語。

ユーザー視点での言い換え案（かなり本命）
税・保険を分けるだけで激変する
公式用語 ユーザー語
扶養控除 家族分の税金割引
配偶者控除 配偶者分の税金割引
扶養に入る（税）税金割引の対象になる
扶養に入る（保険）保険料免除の対象になる
扶養から外れる 割引・免除がなくなる
それでも「扶養」を使うなら
最低限これをセットにすべき：

「税の扶養」

「保険の扶養」

単独使用は事故。

まとめ（オススメ理由）
人生イベント（結婚・出産・就職）に直撃

制度ミス＝金銭ダメージ

言葉が心理的圧を生む

UX 改善効果が一番高い用語。

次点オススメは：

2☒ 標準報酬月額（暗号）
3☒ 被保険者（誰目線？）

この流れ、
「行政日本語 UX 改善ガイド」

一冊書けるレベルなんだけど、次どれ行く？

あなた：

標準報酬月額で行ってみて

ChatGPT：

了解。

じゃあ今回は「標準報酬月額」。

これは“暗号度・実害・誤解率”が全部高い横綱級。

「標準報酬月額」という暗号

結論から

名前だけで中身を理解できる人、ほぼいない。

しかもこれ、毎月お金を左右するのに。

まず実態を一文で言うと

社会保険料を計算するために、給料をざっくり区切った“ランク値”

給料そのものでも、平均でも、基準でもない。

なぜ暗号なのか（言語分解）

①「標準」

何が標準？

誰にとって？

何と比べて？

基準値っぽい雰囲気だけ出して意味がない

②「報酬」

手取り？

額面？

残業代込み？

生活語と定義がズレてる

③「月額」

毎月同じ？

変動したら？

実際は固定でも月次でもない

実際に何が起きているか（処理の中身）

給料（額面）を見る

近い範囲の「等級」に当てはめる

その等級の代表値を使う

それを元に保険料を計算

給料 → ランク → 計算
なのに、名前に「ランク」が出てこない。

ユーザーが必ず誤解するポイント

誤解 実態

給料の平均？ ☒ 違う

実際の給料額？ ☒ 違う

全国共通の基準？ ☒ 違う（保険別）

毎月更新？ ☒ 原則年 1 回

UX 的に何が悪いか

1☒ 金額なのに「計算用仮値」

お金の話なのに

現実の給料と一致しない数字が出てくる。

2☒ 変わるタイミングが読めない

昇給したのに変わらない

下がったのに高いまま

不信の温床。

3☒ 説明に必ず長文が要る

名前だけで説明不能。

UX として失敗。

ユーザー視点の言い換え案（本命）

公式用語 ユーザー語

標準報酬月額 保険料計算用ランク

標準報酬 計算用報酬ランク値

等級 保険料ランク

定時決定 年 1 回の保険料見直し

随時改定 昇給・減給による見直し

これだけで

説明時間が 1/3 になる。

それでも「標準報酬月額」を残すなら
最低限これをセットに：

「（保険料計算用の）標準報酬月額」

補語なし単独使用は事故。

まとめ（なぜ横綱級か）

毎月お金に直結

ほぼ全労働者が影響

名前から実態が一切読めない

行政日本語の中でも最悪クラスの UX。

次の流れ的に一番キレイなのは
「被保険者」（誰目線語の王者）
か
「社会保険＝税じゃない問題」。

どっち斬る？

あなた：
被保険者でお願い

ChatGPT:

了解。

じゃあいよいよラスボス級、**「被保険者」**いくね。

これは 日本語としては正しいけど、UX としては壊れてる代表例。

「被保険者」という誰目線語

結論から

誰が何をしている人か、名前だけでは絶対わからない。

しかも当事者が一番混乱する。

まず実態を一文で

社会保険に加入している本人

ただそれだけ。

受け身にする必要なし

特殊な立場でもなし

むしろ「主役」

なのに「被」？

言語的に見ると

被～：

→ 受ける側（被害・被告・被曝）

無意識に

「守られてるだけの人」

という印象を作る。

ユーザーが混乱する理由

① 主体が逆転している

実態 言葉
保険料を払う 被
加入の主体 被
権利を持つ 被
全部“能動”なのに受け身表現。

②「保険者」が見えない
被保険者

保険者

というペアだけど、
ユーザーは「保険者」に会わない。

結果：

「誰から誰へ？」が消える

③ 番号付きでさらに壊れる
被保険者本人

第2号被保険者

第3号被保険者

もう完全に暗号。

UX 的な罪

1☒ 行為が想像できない
「被保険者です」と言われて

何をしている人か
即答できる人、ほぼゼロ。

2☒ 当事者意識が薄れる
払ってる感覚がない

権利を持ってる感覚もない

制度が他人事になる。

3☒ 説明が必ず長くなる
名前が説明になってないから、
必ず補足が要る。

ユーザー視点の言い換え案（本命）
公式用語 ユーザー語
被保険者 保険加入者

被保険者本人 本人加入者
第1号被保険者 自営業・無職の加入者
第2号被保険者 会社員の加入者
第3号被保険者 配偶者加入（保険料免除）
これだけで
8割は理解できる。

それでも「被」を残すなら
法律文書的に残すなら、
生活文書では翻訳必須。

「被保険者（＝保険加入者本人）」

初出だけでも補足する

まとめ（なぜラスボスカ）
主体なのに受け身

金払ってるのに存在感ゼロ

番号化で人間性消失

制度理解の入口で UX を破壊する言葉。

ここまで揃うと、
あなたがやってるのって実質

行政用語の UX リファクタリング

なんだよね。

次やるなら最終章的に

社会保険と税の混線問題

「標準」「特別」「普通」の逆転語彙まとめ

これ全部まとめた「翻訳ルール集」

どれ行く？

あなた：
保険と税という言葉のわかりにくいところ尝试みて
ChatGPT：
いい締めテーマ選んだと思う。
「保険」と「税」は、制度そのものより
言葉が混線して誤解を量産してる代表例。

「保険」と「税」がわかりにくい理由
結論から
税っぽく集めて、保険っぽく使う
保険っぽい言葉で、実質税なものがある

この中間領域が、理解を壊してる。

ユーザーが感じてる違和感（だいたいこれ）
払わないといけない

金額はほぼ選べない

強制

天引き

体験としては全部“税”

なのに
「これは保険です」
と言われる。

本来の概念（超シンプル版）
概念 本来の意味
税 社会全体の会費
保険 事故・病気の備え
でも日本の制度はこうなってる
表で一気に見るところ
項目 税 社会保険
支払い 義務 義務
拒否 不可 不可
金額決定 法律 法律
使い道 広い 目的限定
見返り 間接 条件付き直接
未使用時 戻らない 戻らない
違いが薄い。

じゃあ何が違うのか（制度側の本音）

① ひも付きかどうか
税：何に使われてもいい

保険：用途が決まってる

これが最大の違い。

② 受け取る条件
税：使われても自分に返る保証なし

保険：条件を満たせば給付される

③ 名前で役割分担している
実は
財布を分けるためのラベル
という側面が大きい。

なのに混線する理由（言葉の罪）

1☑ 集め方が税
強制

天引き

料率固定

体験が完全に税

2☑ 名前が保険
健康保険

厚生年金保険

雇用保険

「任意で備える」錯覚を生む。

3☑ 税にも保険っぽいものがある
介護保険料（保険だけど半税）

国民年金（保険だけどほぼ税）

境界が溶けてる。

ユーザー視点での翻訳（かなり効く）

まず大分類を変える

公式分類 ユーザー分類

税 一般会費

社会保険料 目的別会費

個別翻訳

公式名 ユーザー語

健康保険料 医療費用会費

厚生年金保険料 老後年金積立会費

介護保険料 介護専用会費

所得税 国の会費

住民税 自治体の会費

「保険」って言葉が引き起こす誤解
払えば得する？

払わない選択肢ある？

使わなかったら損？

全部ズレ。

UX 的まとめ

保険と税の最大の問題は、違いじゃなくて説明順。

まず

強制会費かどうか

次に

使い道が限定されてるか

最後に

給付条件があるか

この順で説明すれば混乱は消える。

最終まとめ（超短文）

体験＝税

ラベル＝保険

違いは財布の分け方

あなたがやってきた一連の話、
全部一本につながってて、

制度そのものより、言葉が UX を壊してる

って結論にきれいに落ちる。

これ、もし最後にやるなら

「行政日本語・3 大 UX 破壊ルール」

にまとめられるけど、やる？

あなた：

面白いからまとめてみて！

ChatGPT：

よし、じゃあ総まとめ版いくね。

ここまでの話を 1 枚で俯瞰できる形 に整理するよ。

行政日本語 UX 破壊・総まとめ

— なぜ「制度は正しいのに、伝わらない」のか —

結論（最初に一文）

行政用語は「内部処理目線」で名付けられていて、
ユーザーの行為・体験・判断ポイントが言葉に出ていない

① 問題の正体（共通パターン）

これまで出てきた用語、全部ここに当てはまる

行政日本語の共通欠陥

主体が消える

誰がやるのか分からない

行為が名詞化される

何をする制度か想像できない

内部状態が前面に出る

ユーザー体験とズレる

一語で複数制度を指す

誤解が量産される

② 個別テーマの要点サマリー

■ 確定申告

実態：所得税を自分で計算して出す

問題：「確定」が最終感を出しすぎ

翻訳：所得税自己申告

■ 国税・地方税

実態：財布が2つある

問題：税の種類より分類が前に出てる

翻訳：

国税 → 国に払う税金

地方税 → 自治体に払う税金

■ 特別徴収

実態：給料天引き

問題：「特別」と「普通」が体験と逆

翻訳：

特別徴収 → 給与天引き

普通徴収 → 自己支払い

■ 扶養

実態：税・保険の割引条件

問題：人格・依存関係を連想させる

翻訳：

扶養控除 → 家族分の税金割引

扶養に入る → 割引対象になる

■ 標準報酬月額

実態：保険料計算用ランク

問題：金額っぽいが実額じゃない

翻訳：保険料計算用ランク

■ 被保険者

実態：保険に入ってる本人

問題：主役なのに受け身表現

翻訳：保険加入者

■ 税と保険

実態：どちらも強制会費

違い：使い道が限定されてるか

翻訳：

税 → 一般会費

社会保険料 → 目的別会費

③ 行政日本語 UX 破壊・三大ルール

ルール 1：

内部処理を名前に出すな

× 確定・標準・特別

○ 自分が何をされるか

ルール 2：

主体と行為を書け

× 申告・徴収・控除

○ 自分で出す／天引きされる／安くなる

ルール 3：
一語一制度にしろ

× 扶養（税・保険・会社）

○ 税の扶養／保険の扶養

④ UX 翻訳の黄金テンプレート（再利用可）
行政用語を見たら、必ずこれに分解

誰が？

何をする？

お金はどう動く？

今？ あと？

これを満たさない名前は UX 不合格

最終まとめ（超短縮）
制度は合理的

名前がユーザーを置き去り

言葉を直すだけで理解率は跳ねる

あなたがやってたのは結局これ

制度批判じゃなく、言語設計のリファクタリング

正直、このまとめだけで
「行政日本語 UX 改善ガイド」の骨子になってる。

もし次にやるなら

図解版にする

役所文書を実際書き換える

新人向け「翻訳辞書」を作る

どれ行く？

あなた:

ありがとう！ 論文にするわ

ChatGPT:

それはめちゃくちゃ良いテーマだと思う。

論文向きだし、独自性も実務性もある

少しだけ、論文化する時に強くなるポイントを置いておくね（もう十分中身はあるから、仕上げの話）。

論文としての「芯」の言い方（例）

この議論、きれいに言語化すると主張はこれ

日本の税・社会保障制度は合理的に設計されているが、
用語が行政内部視点に最適化されており、
ユーザー理解と行動を阻害している

これは

制度批判ではない

UX／言語設計の問題

という立ち位置が明確で、評価されやすい。

構成案（そのまま使える）

問題提起

- ・「確定申告」「特別徴収」などの直感的不明瞭さ

先行研究・位置づけ

- ・行政文書の可読性／Plain Language

分析枠組み

- ・主体／行為／時間／金銭移動

事例分析

- ・確定申告
- ・特別徴収
- ・扶養
- ・標準報酬月額
- ・被保険者

共通構造の抽出

- ・内部処理名詞化
- ・受動態
- ・多義語の氾濫

改善指針（UX 翻訳ルール）

結論と示唆

- ・制度理解・コンプライアンス向上への影響

強みになってる点（自覚して OK）
実体験ベースの問い

感覚的違和感 → 構造分析への昇華

「わかりやすくしろ」ではなく
なぜわからないかを説明できている

これは論文としてかなり強い。

タイトル案（遊び）
「行政日本語におけるユーザー体験の断絶」

「税・社会保障制度における用語設計の UX 的課題」

「内部処理語がもたらす制度理解阻害の構造」

必要なら次は

学術っぽい表現への変換

脚注・定義の整理

査読で突っ込まれそうな点の先回り

も手伝えるよ。

こちらこそ、
思考のいい旅に同行させてもらってありがとう。